

Beyond Sato-yama

里山を未来へ継ぐ

1 はじめに

交流の回廊

さとやまに

観る未来

幸田町の里山は、人と自然が長い時間をかけて育んできた「暮らしの原点」であり、「未来をつくる資産」です。薪炭材や山菜、水の恵みを受けながら生きた先人の知恵と、田畑・ため池・社叢といった文化的景観が織りなす里山は、町の将来像である「緑住文化都市」と「SDGs未来都市」の理念を支える大切な基盤となっています。

幸田町では平成元年から転入急増した大企業従業員が定年退職を迎えており、その受け皿・居場所づくりと健康増進のためのフィールドとして、里山を活かしたウエルビーイングと将来におけるコモンズとして機能するようにし健康寿命の増進を図ることを推進しています。

令和5・6年度の報告書では、町内の里山林道、エコトーンの豊かさを紹介し、生涯現役、健康寿命の延伸を踏まえた循環型社会の担い手としての里山の役割を整理しました。

令和7年度は、幸田町の里山が持つ価値を「町内外との共生」「交流人口・関係人口の拡大」という視点から再整理し、国道23号バイパス沿線の里山を新たな「交流の回廊」として捉える挑戦を提言します。

地域に住む人だけでなく、訪れ、関わり、ともに活動する人々が増えることで、里山はこれまで以上に多様な価値を生み出します。本報告書は、その未来への一歩を示すものです。

1章	はじめに・・・・・・・・・・	1
	ビヨンドサトヤマとは？・・・	3
2章	幸田町の原風景・・・・・・・・	5
3章	里山ウエルビーイングとは・・	15
	里山ウエルビーイングセミナー 「幸田の資産、里山を知る」・・	17
4章	共生への挑戦・・・・・・・・・・	19
5章	里山未来風景・・・・・・・・・・	27
6章	まとめ・・・・・・・・・・	29
7章	識者の言葉・・・・・・・・・・	31

（愛知大学名誉教授
黒柳孝夫先生）

Beyond Satoyama

人の心に 木を植える

ビヨンド サトヤマとは？

「Beyond (Beyond)」とは、「超える」「その先へ進む」という意味を持つ言葉です。
「ビヨンド サトヤマ」とは、里山を保全や管理の対象としてのみ捉える従来の考え方を超え、人と自然が共に響き合い、新たな価値が生まれる場として再定義する考え方を指しています。

日常を降りて里山へ「よりみち」しませんか。

里山を保全・維持される「守られる場所」から、新しい価値が「生まれる」共奏の場所へ。
これまで里山は人の都合に合わせて「管理」されるべき場所と考えられていました。
しかし、幸田町が掲げる「ビヨンド サトヤマ」はその認識を鮮やかに超えています。
「共奏」が私たちの閉じていた感性を呼び覚まし、心地よい刺激と安らぎを与えてくれるのです。
そこで見つかるのは、数字や経済的な価値では量ることのできない、自分自身の内面から湧き上がる無量の喜び。私たちはそれを「心価」と呼びます。

里山は管理すべきものという認識をいったん忘れ、五感で触れてみる。すると人と自然が一体となったように感じ、里山の持つ「真価」に気づかされます。効率やコストパフォーマンスが優先される管理社会から少しだけ離れて、里山へ「よりみち」をしてみませんか。ただ目的の地へ急ぐのをやめて、自分の足で地面を感じ、鳥のさえずりや葉音に耳を澄ましてみる。すると日常の中で忘れかけていた感性が少しずつ甦ってきます。「競争」から「共奏」への昇華。里山を歩くことを目的としたとき、幸田町を貫く国道23号バイパスの側道は里山と町全体を結ぶ「交流の回廊」へと姿を変え、自然と人、人と人の縁を結んでいきます。

この回廊を歩く一歩一歩には予期せぬ自然の息遣いや、人との温かな触れ合いが満ちています。その「偶然との



Beyond Satoyama “Shinka”の図

里山ウェルビーイング報告書の3部作について
vol.1では里山の魅力や資源的価値を伝え、vol.2では町内各地の里山の魅力を深掘りし、その活用方を模索。本vol.3では、vol.1,2を振り返った上で里山との共奏、未来像を描き、現代を生きる我々に対して問いを投げかけています。



国道23号バイパス幸田須美インターを挟み須美北山を望む

2 幸田町の原風景

地区ごとの

特性と価値

幸田町の里山は、森林・ため池・社叢・田畑が連続し、人の営みと自然が共鳴しながら形づくられてきました。

過去10年の幸田町住民意識調査報告書における幸田町のよいところは？の問いにおいて「緑や川などの自然環境が豊かな」の回答が全世帯・全小学校区において5割以上を占めて連続1位でした。
(令和6年度調査では59.4%)

問 Question

幸田町の
よいところは



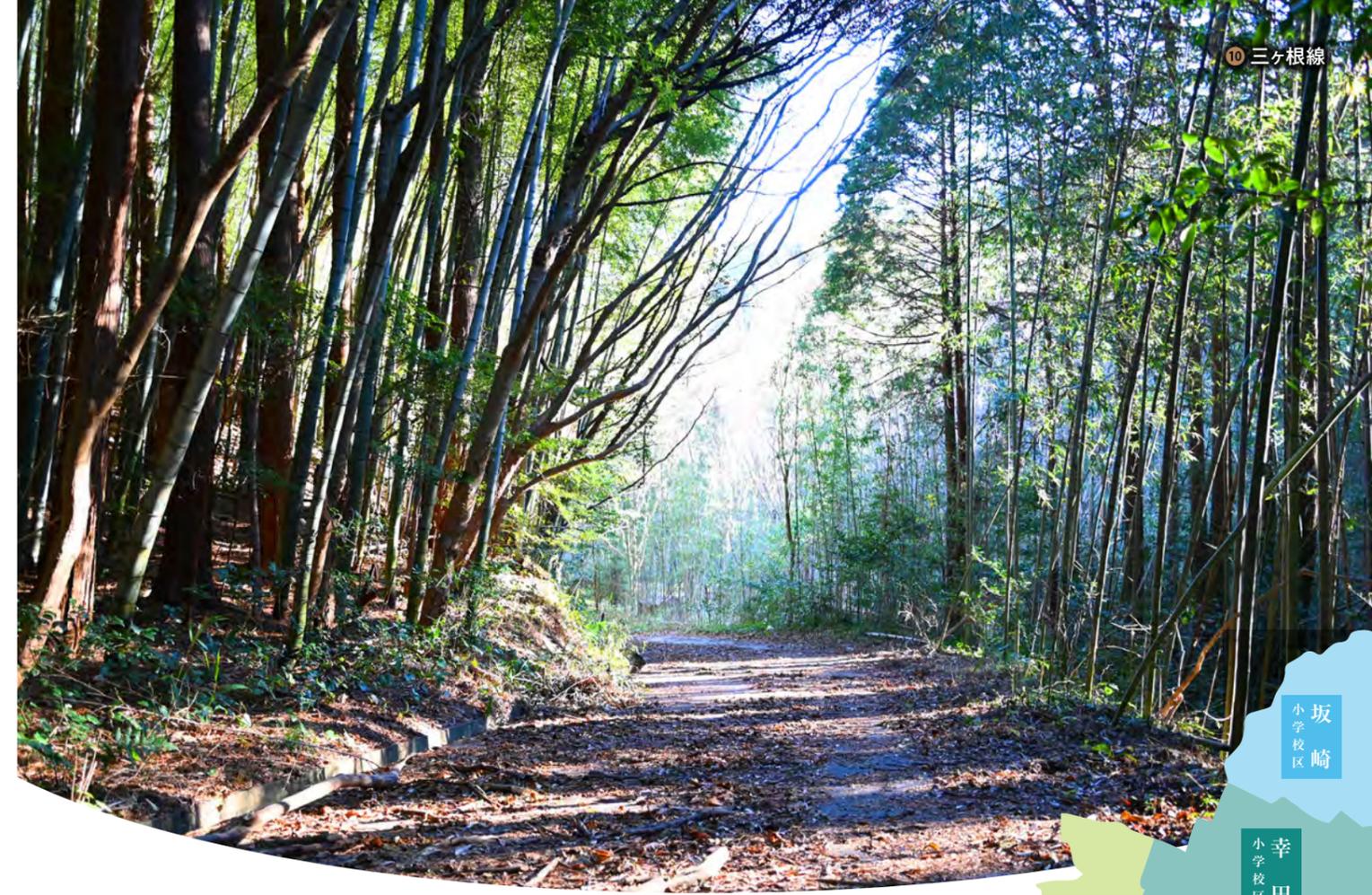
里山は「自然のまま」ではなく、人の手が入ることで新たな景観や生態系を生み出してきました。薪炭林の更新、落ち葉堆肥の循環、ため池整備、社叢の保護など、人と自然が響き合う営みが、今日の豊かな里山風景を形づくっています。

この原風景は、幸田町が掲げる「緑住文化都市」の理念と密接に結びついており、さらに「SDGs 未来都市」として、森林・水・文化を未来へつなぐ持続可能な取組の基盤となっています。

地区ごとに異なる景観・文化・歴史は「幸田町らしさ」を構成する大切な要素です。

昭和40年代に整備された、幸田町の林道は、地理的にも魅力的な配置を持っています。町の中央を南北に走るJR東海道線をはさんで、東側に20本、西側に8本、合わせて28本の林道があり、そのうち12本は現在歩行が可能です。東側では、北北東の京ヶ峯線①が新住宅地「幸多の杜」に隣接し、新しい住民の憩いの場として発展が期待されます。北東の一之小屋線②は全





林道を歩いて
心と身体を
リフレッシュ!

ここでいうエコトーンとは、生態学において「異なる環境が連続的に推移し接している場所」を指し、たとえば陸域と水域、森林と草原などの境界部分を意味します。幸田町の林道沿いでは、このような環境の移り変わりが至るところで見られ、季節ごとに変化する植物や生きものの姿を間近に感じることが出来ます。こうしたエコトーンの豊かさは、自然観察や環境学習、森林セラピーなど多様な活動の場として、幸田町の里山林道の魅力をさらに高めています。

一方、西側の林道群も個性豊かです。野場地区の宝谷池を通る水晶山線⑦は、起伏が少なく穏やかな林道で、四季折々の水辺と森の移ろいを楽しめます。六栗西山線(計画中)⑧は、市街地や新幹線、国道を見下ろす緩やかな等高線沿いの道で、町全体を一望できる新たな散策路として期待されます。須美南山1号線⑨は、道の駅「筆柿の里幸田」からもアクセスしやすく、観光と里山体験をつなぐルートです。また、三ヶ根線は三河湾国定公園内を通り、山頂へと続く美しい林道で、自然と文化を感じるトレッキングコースとして魅力があります。

これらの林道は、木材搬出や山林管理を支える基盤であると同時に、整備や活用の仕方次第で、町の将来を支える新たな価値を生み出す可能性を持っています。例えば、サイクリングやウォーキングのルートとしての活用は、町民の健康づくりや観光の誘致につながります。また、森林セラピーや環境教育の場として整備すれば、子どもから高齢者まで幅広い世代が自然に親しみ、学び、癒やされる拠点となります。さらに、防災面では林道が避難路や救援路として機能し、地域の安全を支える役割も期待されます。

このように、幸田町の林道は地域全体に広がり、それぞれが異なる景観や体験を提供しています。今後、地域住民や学生、来訪者が協力して整備や利用を進めれば、里山の保全と観光、健康、教育が一体となった持続可能な活動が生まれるでしょう。林道を「木を運ぶ道」から「人と自然をつなぐ道」へと再定義することは、幸田町が目指す「緑住文化都市」や「SDGs 未来都市計画」にも合致するものであり、町の未来を豊かに彩る重要な一歩になります。

林道 Selection



遠望嶺線



京ヶ峯線



鷲ヶ峯線



一之小屋線



須美南山1号線



水晶山からの眺め

小原川砂防ダム



本光寺紫陽花まつり



京ヶ峯展望台



三村神社 神前橋



深溝

Fukōzu

地区



深溝松平家ゆかりの史跡と、
ため池の静かな水辺が美しい
地区です。
落ち着いた自然環境と新しい
交流拠点（カフェなど）
が融合し、「歴史と自然、人
の活動が調和する地域資源」
として高い魅力を持ちます。

歴史文化と
共に息づく里山

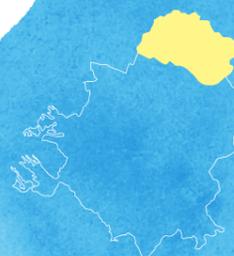
三ヶ根線



坂崎

Sakazaki

地区



生活圏と隣り合う
”身近な里山“
鉄道沿線と住宅地のすぐそば
に広がる里山は、徒歩圏
で自然に触れられる極めて
希少な地域資源です。
水辺と森林が織りなす景観
は四季を豊かに映し出し、
子どもから大人まで学びと
憩いの場として活用が期待
されます。

林道一之小屋線



石塚下池



相見川



県道41号 メタセコイア並木



深溝断層



県道78号からJR相見駅を望む





大井池弁財天



猿田彦三河神社 参道



不動ヶ池



貴嶺宮 本殿

大草 Ōkusa
地区



神社と社叢に
守られた里山の時間

猿田彦神社をはじめとする社叢は、古くから人々の営みと自然の調和を支えてきました。祭礼や文化が息づくこの地域は、「自然と信仰のつながり」が風景を形づくる特性を持ち、交流・学習の場としての価値が高まっています。



大草神社



林道鷺ヶ入中口線



林道深山線

荻 Ogi
地区



水と森が奏でる
文化景観

山あいの森、ため池、寺社などがつながり、自然と信仰が重層的に残る地域です。地域住民の保全活動や学びの場としても活用が進み、里山の「未来への継承」を象徴する地区といえます。



国道23号バイパス
幸田芦谷インター 付近側道より



浄土寺の山門と参道階段



大井池の紅葉



尾浜川沿いの桜



遠望嶺山 から幸田、岡崎平野を望む

これらの地区に共通する価値は
「人と自然の共奏」。
生活・文化・歴史が積層しながら、
町民と訪れる人の心を
つなぐ場となっています。

人と自然の共奏



六栗

Mutsumiguri

地区

三河湾を望む
”眺望の里山“
高台の水晶山から望む三河湾は、町内屈指の景観資源です。谷筋の自然が豊かで、静けさと開放感を同時に味わえる地区であり、観光・滞在型の交流拠点として大きなポテンシャルを備えています。

須美南山1号線

須美南山1号線 竹林



新池



JR幸田駅と水晶山

3 里山ウェルビーイングとは

自然と人が

響き合う

暮らしの質

幸田町が目指す「里山ウェルビーイング」は、自然と人の関係性を再構築し、暮らしの質（QOL）を向上させる地域モデルで「自然と共にある暮らしが、心身・社会・地域に豊かさをもたらす状態」を指します。

幸田町における里山ウェルビーイングは次の5つの視点に基づきます。



幸田しだれ桜まつりと春化粧の水晶山(幸田文化公園)

View 1
自然の恵みを授かる
暮らしの再生

里山は、薪炭材、落ち葉堆肥、山菜・葉草、湧水・ため池など、人の生活を支える総合的な資源供給地でした。この自然の恵みを再評価することで、環境教育や体験型観光、地域文化継承の基盤となり、「自然と人が資源を分かち合う循環」は、現代の持続可能な暮らしのヒントとなります。



林道 遠望嶺線道中の清水

View 2
人の営みが紡ぐ
多様な景観

雑木林、竹林、棚田、社叢、ため池、林道など、地域ごとに異なる里山の姿は、人の手が加わることで生まれた景観です。明るい雑木林は昆虫や草花を育み、ため池は生態系と農を支える「水の文化」を形成しました。これらは生活と自然が織りなす「文化景観」として大きな価値を持ちます。

View 3
世代や地域を越えた共生

子ども、子育て世帯、働き盛り世代、高齢者、そして町外の人が里山を介してつながることで、孤立や分断を超えた社会参加の機会が生まれます。

View 4
心身の健康・学び・文化の拠点

森林浴、散策、トレイルラン、自然観察、地域祭祀。自然に触れることは心の安定をもたらし、子どもたちの学びや文化継承にも繋がります。

View 5
交流人口・関係人口を育む地域資源

里山の静けさ、景観、文化、林道ネットワークは、アウトドア、ワーケーション、ツーリズム、教育プログラムに活用でき、人と地域の新しい関係を生み出します。



熊野神社 鎮守の社



筆柿収穫体験



六栗活動拠点エリアブランコ



マシュマロ焼き

幸田町の里山ウェルビーイングは、自然・文化・人々の営みの「調和」を未来へつなぐアプローチです。



人間環境大学 環境科学部 フィールド生態学科 准教授 江口則和氏

幸田の資産、

里山を知る

里山ウェルビーイングセミナーを令和7年11月19日に、人間環境大学環境科学部フィールド生態学科 准教授 江口則和氏を講師に迎え「幸田の資産、里山を知る」をテーマに開催しました。

江口准教授は町内各地区の里山を紹介し、「幸田町ならではの特徴は、歴史、信仰、文化に支えられた自然景観が生活空間と結びついていることだ」とした上で、「林業のために作られた林道や人工林を地域資源と捉えて整備すれば、健康、レクリエーション、観光など今日的な活用の可能性があるのでないか」と解説しました。

さらに「そうは言っても、上から目線からの押し付けは反発を招くので、住民、行政、企業などが一緒になって森林サービス産業や地域モデルを構築することが魅力的なまちを作り、里山ウェルビーイングの実現につながると思う」と語りました。

コーディネーター
志賀幸弘
サポーターセンター 副センター長
幸田町シニア・シルバード世代



大草神社 宮司 磯部一郎氏

当然森の木は痛む。手入れや管理は大変だが、今手を打つことで次の世代、その次の世代に残せると思って頑張っている。



貴嶺宮 宮司 山蔭仁嘉氏

昨今、「鎮守の森は何の役に立っているのか」との質問をいただくようになった。しっかり答えていかなければと感じる。また森の中は携帯電話の電波が届かないことが幸いして、デジタルデバイブの価値も提供していきたい。



鷺田神明宮 総代 及川賢考氏

私自身は幸田町出身ではないが、昔からの人々と新しい人たちが一緒になって鎮守の森を大事にしようとしている。



愛知大学 元副学長 黒柳孝夫氏

効率や生産性ばかりを追い求め、便利で安全であればいいという風潮は見直すべき。(幸田町の)文化財保護委員として筆柿の木を文化財に指定したが、自然環境も文化であり、町民と共に共有したい。



人と自然とが共奏する場所

坂崎地区 Sakazaki 各地の里山 深溝地区 Fukuzu 各地の里山 荻地区 Ogi 各地の里山

①自然の恵みを感じる暮らしの場
②人の営みがあふ多彩な自然

幸田の資産、里山を知る

2025.11.19(水) 14:00~15:30

人間環境大学 環境科学部 江口則和

幸田町には安全な林道が多数存在
整備・アイデアでレクリエーション・観光・健康など地域振興に繋がる可能性も!

2025年秋、次期西山の森に100匹のアサギマダラ
※アサギマダラ
・数千キロを旅する希少なチョウ
・飾りの強い花(フジバカマなど)を好む
アサギマダラも呼べる森林整備を計画
→「緑住文化都市」につながる未来への取組

TEL:0564-73-0050/FAX:0564-73-0051

4 共生への挑戦

国道23号バイパス

沿線から始まる

新たな地域交流

幸田町の国道23号バイパス添いの里山は、単なる自然ではありません。

人の働きと、森の息づかいが交わる環境そのものです。

新しい価値を生む場所には、いつも豊かな風景があります。

この里山は、その舞台のひとつかもしれません。

① デンソー幸田製作所と国道23号バイパス高架、東海道新幹線を一望に収める

② 幸田文化公園希望の塔より国道23号バイパスと国道248号の交差箇所を望む

④ 側道から茶臼山方面を望む

③ 火神社鳥居から国道23号バイパスを望む

可能性のある4つのエリア

① 道の駅「筆柿の里・幸田」から幸田須美インター周辺まで

② 幸田須美インターから西尾市境まで

③ 道の駅「筆柿の里・幸田」から幸田桐山インター周辺まで

④ 幸田芦谷インターから蒲郡市境まで

この4つのエリア内を回遊することによる魅力の情報発信から次の可能性に繋がります。特に、道の駅「筆柿の里・幸田」を拠点にした回遊は、町外来場者に強くアピールすることができます。

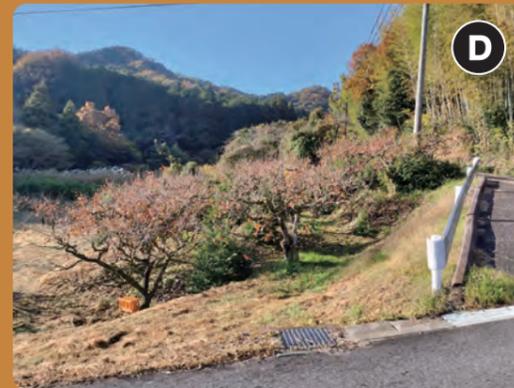
⑥ 西尾市茶臼山203展望台から北東を望むと手前に国道23号バイパスと工場群、遠くに相見駅周辺や坂崎の市街地を見渡す



可能性のある
4つのエリア

2

幸田須美インターから
西尾市境まで



Point

幸田須美インターから、上り線側道添いの里山を楽しむ。東側に点在する柿、みかんの果樹畑を眺められるコース。上り線側道への横断ガードが六箇所あり、お好みのコース設定が可能。自動車は片側通行。

可能性のある
4つのエリア

1

道の駅「筆柿の里・幸田」から
幸田須美インター周辺まで



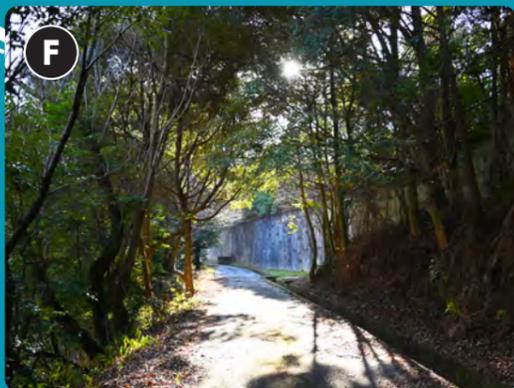
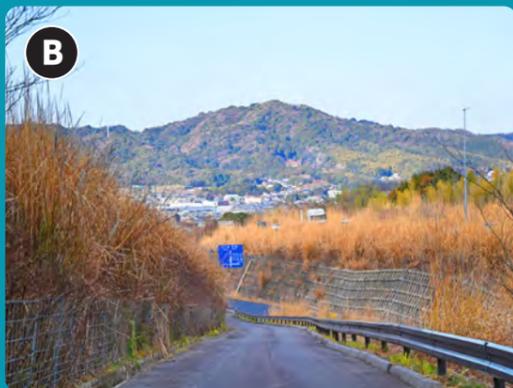
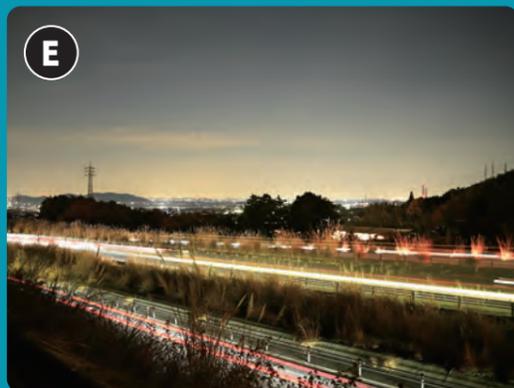
Point

道の駅「筆柿の里・幸田」を拠点に、下り線側道添いの里山を楽しむ。西側に点在する柿、みかんの果樹畑を眺められるコース。上り線側道への横断橋が三箇所あり、お好みのコース設定が可能。自動車は片側通行。

可能性のある
4つのエリア

4

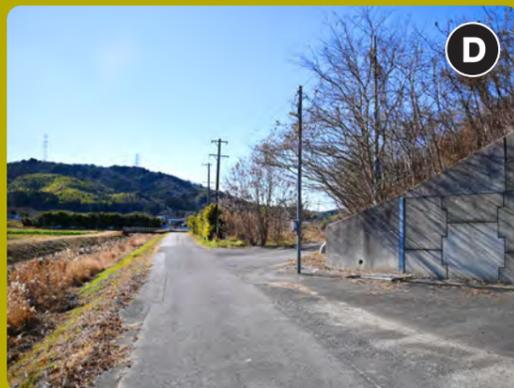
幸田芦谷インターから
蒲郡市境まで



Point

幸田芦谷インターから蒲郡市境までの上り線側道添いの里山と稲基池、下り線側道添いの里山を眺め楽しむことができる。上り下り線側道への横断ガードが一個所ある。自動車は両側通行となる。幸田芦谷インター東の下り線側道はバイパスよりも高い位置にあり、幸田駅前市街地を眼下に見下ろしながら稜線の眺めを楽しむことができる。

A



可能性のある
4つのエリア

3

道の駅「筆柿の里・幸田」から
幸田桐山インター周辺まで

Point

道の駅から幸田桐山インターまでの上り線側道添いの里山を楽しむ。東側に点在する柿、みかんの果樹畑を眺められるコースと、西側の田畑を手前に、西側の稜線を楽しむことができる。上り線側道への横断ガードが七個所あり、お好みのコース設定が可能。自動車は両側通行となるが、東側の側道は一部分のみとなる。

テーマは、
「町内外の人びとが集い、
関わり、共に育てる里山」
へのチャレンジです。

国道23号バイパスは東三河・西三河をつなぐ広域交通軸であり、町外からのアクセスに優れ、里山原風景が近接する貴重な地域でもあり、交流人口・関係人口の増加に向けた「新たな里山フロント」として注目されます。
バイパスの側道は、起伏がなく身体の負担もないので、安全・安心に楽しく歩行することができます。



西尾市 茶臼山 203展望台から相見・坂崎方面を望む

4つのエリアのそれぞれにおける、
4つの可能性

① 里山×交流の可能性

国道23号バイパス沿線の里山は、アクセス性の高さから
・ 散策・森林浴
・ サイクルツーリズム
・ トレイルランニング
・ 自然観察
・ 歴史文化学習
など、多様な活動が展開しやすい特性を持っています。

未舗装林道や作業道は、自然の質を保ちながら適度な傾斜と距離を提供し、初心者でも安全に楽しめる「森林スポーツ基盤」として活用できます。



六栗西山森の道整備隊
活動拠点エリアでのアクティビティ



芋掘り体験

② 関係人口を育てる
”里山参加型”の仕組み

・ 里山ボランティアの受け入れ
・ 森林保全活動への参加
・ 企業のSDGs*、CSR*、ESG研修*
・ 地域アクティビティの共創
など、町外からの参加者と地域住民が協働する仕組みは、里山保全の持続性を高めると同時に、人のつながりを創出します。

*SDGs (持続可能な開発目標) とは、2030年までに持続可能でより良い世界を目指すための国際目標です。
*CSR (企業の社会的責任) とは、企業が利益を追求するだけでなく、社会や環境に対して責任を持ち、積極的に貢献することを求める考えです。
*ESG とは、持続可能な社会の実現に向けて、企業のあり方を環境 (Environment)、社会 (Social)、企業統治 (Governance) の頭文字を取った言葉で、企業や投資活動において、これらの要素を重視する考え方を指します。

③ 文化・歴史・景観を活かした地域交流

国道23号バイパスを活かした、坂崎の身近な自然、深溝の史跡、萩の水辺、大草の社叢、六栗の眺望、地区ごとの物語を織り合わせることで、来訪者に「地域を歩く楽しさ」を提供できます。
そして高齢者の社会参加、役割づくり、健康増進にも期待できます。
里山はその中心となるフィールドであり、次のような観点で活用が可能です。

① 林道・遊歩道整備への参加
(活動型健康づくり)
下草刈り、軽作業、見回り活動は、身体への負担が少なく安全で、運動効果も期待できます。

② 里山ガイド・里山案内人の養成
(役割の創出)
地域の歴史・自然を語る人材は、町内外の来訪者の案内役として重要となります。

③ 間伐材・竹材の利活用
(働く場づくり)
竹炭、チップ、クラフトなど、小規模でも持続的な仕事が生まれます。

④ 交流拠点の整備
(社会参加の接点づくり)
カフェ、集会所、体験拠点を核に、地域住民と来訪者が混ざり合う場を形成します。

④ 国道23号バイパス沿線の提言(案)

・ 里山回廊(トレイル+林道)化による周遊性向上
・ ビジター向け案内・観察ポイントの整備
・ 文化・景観資源を結ぶ
・ 「里山ストーリー」発信
・ 企業研修・教育旅行の誘致
・ カフェ・地域拠点とのネットワーク化



水晶山 登山道

これらの地域は、
「訪れる人と地域が共に里山を
育てる交流拠点」として、新
しい可能性を秘めています。

5 里山未来風景

未来をつくる

”共奏のまち”へ

幸田町の里山が描く未来は、単なる保全でも開発でもありません。人と自然が互いに響き合い、文化と暮らしを育む”共奏の未来”です。

その未来風景は、次のような姿として具体化していきます。



共奏のまち

1 自然と暮らしが近いまち

生活圏から数分で里山にアクセスでき、子どもたちが自然の中で遊び、大人は散策や森林浴を楽しむまち。



共奏のまち

2 交流で育つ里山

町外の人を訪れ、関わり、学び、また帰ってくる。
”まちのファン”が増え、里山保全に参加する新しい関係人口が育つまち。



共奏のまち

3 文化と歴史が生きる風景

社叢、祭礼、ため池、里地里山の景観が、地域の誇りとして未来へ引き継がれるまち。



共奏のまち

4 既存の林道ネットワークが広げる活動の場

安全に整備された林道・作業道が、
・トレイルラン
・サイクルツーリズム
・自然観察
・学習プログラム
の舞台となり、里山を楽しむ多様な人を迎えるまち。



共奏のまち

5 SDGS 未来都市としての持続可能なまち

資源循環、森林管理、環境教育、健康づくりが一体となり、環境・社会・経済の調和した未来を創り出すまち。

幸田町の里山は、過去の遺産ではなく、未来をつくる資産。
人と自然が共に歩む”里山ウェルビーイング”の取り組みは、これからの町の豊かさを形づくる礎となります。

幸田町の里山は
過去の遺産ではなく、
未来をつくる舞台です。

里山を「住む人」だけでなく、
「訪れる人」「関わる人」へと広げていくことで、
幸田町の未来像である 緑住文化都市が深化し、
それを見据えた「共生への挑戦」として、
町内外の人々とともに、
次世代へ誇れる里山を育て
里山ウェルビーイングを実践していきます。

現代社会のなかの「里山」

管理すること、
手入れすること

植物を管理する論理。植物を手入れする論理。植物を管理するとは植物の特性を無視して人間の都合の良いように植物を管理すること、植物を手入れするとは植物の特性を尊重しながら手入れすることです。現代の私たちは自己本位に生きているようで、実は植物を管理する論理のように自らを管理しているのではないのでしょうか。逆にいえば、管理されていることを肯定した生き方が求められているような気がします。

私たちはグローバル化していく市場経済に翻弄されながらも、なお市場経済のなかに自分たちの居場所を求めなければならぬ現実。ますます人工環境が推進される社会が今後どのような社会を生み出すかわかりませんが、日常から抜け出せないでいます。生成AI（人工知能）によって生み出された人間の知識、学習能力をコンピューターに託す技術、情報技術をデジタル化させ社会のあらゆる領域に浸透普及させるDX（デジタルトランスフォーメーション）など。パーチャリリアリティー（仮想現実）に厭きてリアル（現実）を求めているのにその社会で呼吸するしかない自分たちがいます。

内と外のすみわけ

頭で考える能力も大事です。一方心で感じる能力も大切です。日本人は古くから人間の気持ちを第一に尊重してきました。周囲の人間に対する気づかいは、自然に対する深い愛情と深く結びついていました。里山を歩いていると多忙な日常のなかで日頃忘れかけていた感覚が甦ることがあります。

日本の文化はもともと自然を善なるものとし、自己と根本的に区別できないものとして認識していました。和歌・俳句・絵画・建築・茶道などがそれで、日本の伝統文化・日本人の品性はこの自然との一体感・親和性のなかから生まれてきたといえます。諸行無常・万物流転・惻隱の情・ものあはれ・秘すれば花・わび（侘び）・さび（寂）・余白の美……。初めてのの方は一度辞書をひいてみてください。

企業論理である成果主義・能力主義は豊かさを数字で量れますが、一人ひとりの喜びや深い悲しみは決して数字では量れないものです。時には里山に出かけ、自然の営みに耳をすませ、心を解放させたいものです。

「厭きる」とは、

何かに対して嫌気がさす、または嫌になるという意味です。例えば、同じ仕事を長時間続けていると「厭きる」ことがあります。この言葉は、精神的な疲れや不快感を伴うことが多いです。

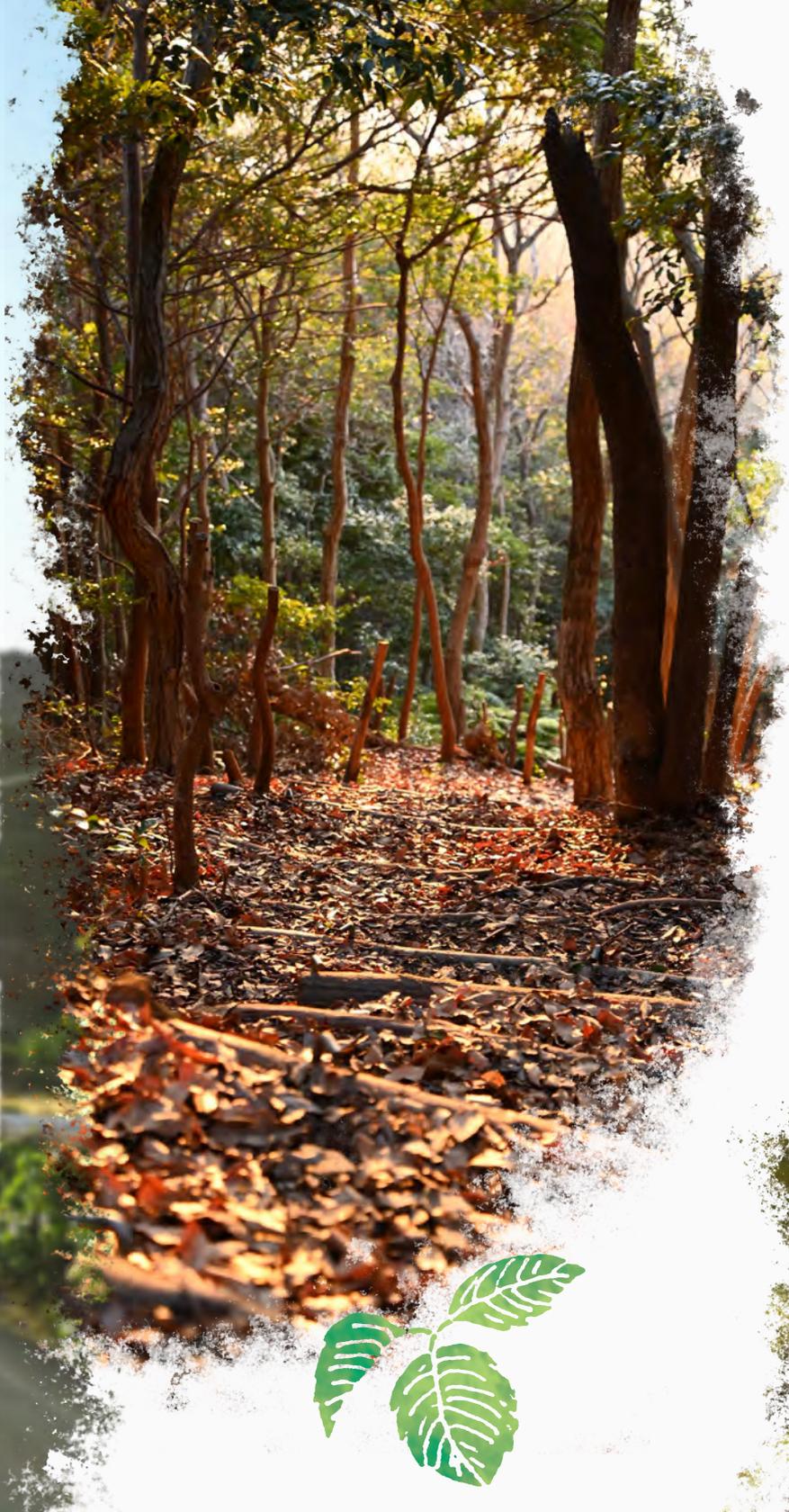
「飽きる」とは、

何かに対して興味や関心が薄れることを指します。例えば、同じ食べ物を毎日食べていると「飽きる」ことがあります。この言葉は、単調さや繰り返しによる退屈感を表します。



愛知大学名誉教授
黒柳 孝夫 先生

1969年 國學院大学文学部文学科卒業
1970年 愛知大学文学専攻科修了
1975年 愛知大学短期大学部専任講師
1994年 愛知大学短期大学部教授
2005年 愛知大学理事・短期大学部長
2006年 愛知大学常務理事・副学長
2007年 愛知大学国際交流センター所長
2011年 愛知大学理事・短期大学部長
2015年 愛知大学名誉教授 至現在



保
全
と
発
展
、
過
去
と
未
来
、
里
山
と
と
も
に
歩
み
続
け
る



報告者

 幸田町生涯現役推進協議会

愛知県額田郡幸田町大字上六栗字堀合 41 番地 1

幸田町生涯現役館内

事務局：幸田町シニア・シルバー世代サポートセンター

tel 0564-73-0050

発行：令和8年3月

令和7年度厚生労働省生涯現役地域づくり環境整備事業